吹上町田尻の金銅菩薩立像の伝来について

竹　森　友　子

はじめに

黎明館が寄託保管している資料に吹上町田尻の金銅菩薩立像があるが，それは形式や様式から飛鳥仏と考えられている。仏像が伝わっていた吹上町田尻が古代の阿多の地域であることから,「沙門を大隅と阿多とに遣わして，仏教を伝ふべし。復，大唐の大使郭務悰が御近江大津宮天皇の為に造れる阿弥陀像を上送れ」（『日本書紀』持統六年閏五月己酉条）との関連で注目されているが，残念ながらこの地に祀られていたことが確認できる上限は享保２(1717)年までである。また，史料に「阿弥陀像を上送(たてまつ)れ」とあるので，持統６（692）年に大隅や阿多にもたらされた仏像は，吹上町田尻の金銅菩薩立像とは言えない。よって全国の出土・伝来した飛鳥・白鳳仏像を手がかりに，当地への伝来について考察していきたい。

なお本稿では，飛鳥時代を飛鳥文化の時代の意で６世紀末から７世紀半ば（大化の改新）以前，白鳳時代を白鳳文化の時代の意で，７世紀後半以降８世紀初頭という美術史の時期区分として用いている。

１章　吹上町田尻の金銅菩薩立像について

まず，吹上町田尻の金銅菩薩立像の概要を述べておきたい。仏像は，宝冠を頂き，腹前で左右の手のひらを上下にして，宝珠を包むようにして持つ金銅製の菩薩像である。足下の台座蓮肉(れんにく)部までが一鋳で，後背は後頭部に取り付ける枘(ほぞ)穴を残して失われ，蓮肉部装着の台座も失われており，現在は平成 22 年に制作されたものが取り付けられている。法量は宝冠と蓮肉を含んで総高 16.3cm，体部の厚み 1.4cm ほどの小金銅仏である。長身で扁平な体躯(たいく)，左右の体側に魚鰭(うおひれ)状に張り出した天衣(てんね)など，形式や様式から飛鳥仏と考えられている[1]。

そのしぐさの特徴から宝珠奉持(ほうじゅほうじ)菩薩像の一例といえる。宝珠奉持菩薩像とは，中国南朝で信仰された仏像で，６世紀中頃になると持物(じぶつ)が宝珠になり，南朝から仏教が伝えられた百済にも受容されたという[2]。宝珠を撫する両手のしぐさ，板金式の胸飾り，胸前の僧祇支(そうぎし)の衿縁が右肩から左脇へクロスする逆の形式が同様であることなど，奈良市藤原台の東南部にある横井廃寺出土の金銅菩薩立像との酷似が指摘されている[3]。

写真１　吹上町田尻の金銅菩薩立像
（吹上町御観音講蔵・黎明館保管）

横井廃寺はその出土創建期軒瓦から，620年代後半に造営が開始され，７世紀前半には主要伽藍の堂塔の造営がほぼ進展していたと推測されている。また，横井廃寺が建立された一帯は和邇(わに)系氏族が集中して居住する地であることから，和邇系氏族による造営が考えられている[4]。飛鳥時代の創建期軒丸瓦は，奥山久米寺式（奥山久米寺から近年「小治田寺」と記された墨書土器が出土し，小治田寺と呼ばれている）で，横井廃寺と同笵のものが，天理市の石上廃寺や奈良市の姫寺廃寺から見つかっている。白鳳時代の軒丸瓦の同笵瓦は法隆寺（斑鳩町）・櫟本(いちのもと)廃寺（天理市）・平城京（奈良市）から見つかっており[5]，いずれにしても現在の奈良県内の寺院と関係が深いことがわかる。

2章　金銅菩薩立像が伝来した吹上町田尻について

1節　地域で守られた仏像

はじめにでも書いたが，わかっているのは享保2年から田尻の御堂で祀られていたということだけである。その御堂に伝えられていたとされる杉板には「享保二年ノ頃伊作村字田尻ノ小字寺園西ノ宇都ニ堂宇ヲ建立シ以テ勧請奉安セラルゝニ爾来善男善女ノ信仰アサカラズ」とあり，堂宇が建てられており，

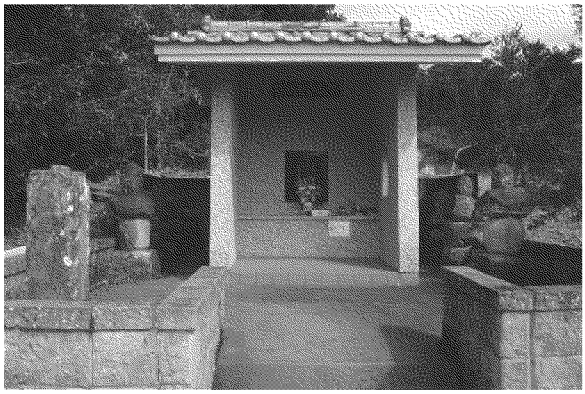

写真２　現在の御堂

集落の人々の信仰も厚かったことがわかる。その後廃仏毀釈で堂宇が壊され，仏像のみは寺園家で保管し，大正６年に寺園組合有志により新しい堂宇を新築し，同年の１月18日に法要が行われたことまでが，杉板の縁起には記されている[6]。その後，昭和56年に飛鳥仏発見かと報道されてからは，観音講中各戸1年交替で保管され，現在本物の仏像は鹿児島県歴史・美術センター黎明館に寄託保管されているが，レプリカの金銅菩薩立像に入魂したものが新しい御堂に安置されている。現在の御堂には，大正時代の御堂の近くにあったとされる石造五輪塔なども集められているが，その中に「享保二年」銘のある石塔もある。（写真２・３参照）庚申供養のために石塔は建てられたという。（表１参照）

庚申信仰は中世にまで遡る，道教に影響を受けた信仰だが，「かのえさる」を縮めて「かねさる」から「カネサッドン」と殿がつき，さらに「サッドン」となって「作ドン」の講に変わり，庚申講は農作の講にもなった。庚申講は結束が固く，集まった資金で神社や寺の灯籠や仏像，田の神像を作る母体ともなったらしく[7]，享保２年に建立された御堂は庚申講が母体となっているのかもしれない。また，建造の理由，寄進者 10 名の内６名（八尋 2007 では関庄左衛門と吹上郷土誌 2003 では関主左衛門と翻刻しているが，写真３（右）を見ればどちらとも見えるので，同一人物であろう）が御堂前の石造と同じ庚申塔が，直線距離にして 500m ほどの宮下家前に

造塔年・理由	寄進者名	
御堂前・宮下家前	御堂前	宮下家前
享保二丁酉年	久右衛門	久右衛門
奉造建庚申供養	長兵衛	長兵衛
正月廿八日	絲右衛門	弥右衛門
	長兵衛	長右衛門
	善左衛門	善左衛門
	紋介	紋介
	為兵衛	福兵衛
	久兵衛	実兵衛
	野瀬勘右衛門	野瀬勘右衛門
	関庄左衛門	関主左衛門

表1　御堂前・宮下家前の庚申塔銘の内容
八尋和泉2007、47頁・『吹上郷土誌　通史編三』313頁を参考に作成

写真３　御堂前の石塔正面（左）と側面（右）

も存在しており，実見したところ御堂前の石塔と宮下家前の石塔は彫られた字もそっくりなため，同時期に同一制作者により作られたものと思わる。県指定有形民俗文化財となっている中田尻の田の神像も台座銘に「奉供養田□享保二丁酉年正月十四日」とあり[8]，享保２年は田尻村にとって特別な年であったのかもしれない。

江戸時代の田尻村は，弘化２（1845）年の段階では，中村門・畠中屋敷・寺園門など 31 の門と９の屋敷から構成されていた[9]。金銅菩薩立像が安置されていたのは，寺園門ということになろう。また，文政７（1824）年 12 月の「名勝志御再撰方萬しらへ帳　伊作」によると，田尻村には 11 の仏堂と 1 の寺院が存在していた。（表２参照）それによると，寺園門に観音堂が存在したことがわかるが，本尊は木像立像となっており，本論で問題としている金銅菩薩立像ではない。ただ，この御堂は大きさ方二間（約 3.6m）で，その中に方壱尺五寸（約 45cm）の厨子があるようだが，本尊は高さ弐尺程（約 60cm）なので，厨子には収まらない。高さ約 16.3cm（台座まで含めると 20cm 前後か）の金銅菩薩立像が納め

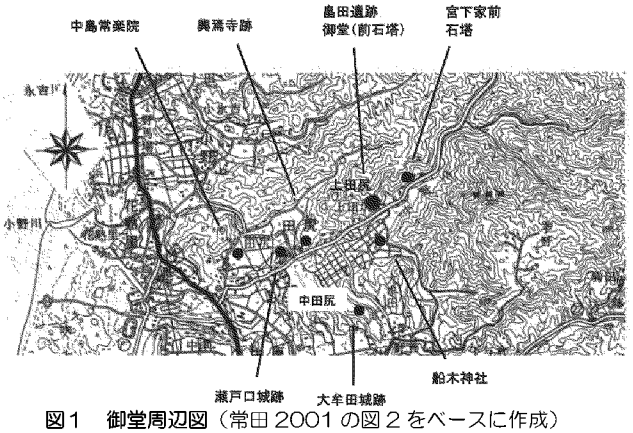

図１　御堂周辺図（常田 2001 の図２をベースに作成）

	寺院・仏堂	所在地	本尊	大きさ	備考
1	地蔵	十文地	木仏座像	1尺3寸(約30.9cm)	
2	地蔵	野久尾	木仏座像	1尺3寸	
3	阿弥陀	**堂原**	木仏座像	2尺7寸(約62.1cm)	伝：大汝八幡下向の際供奉
4	地蔵	**立花木**	石像立像	1尺6寸5部(約49.5cm)	
5	観音	**寺園**	木像立像	2尺(約60cm)	伝：大汝八幡下向の際供奉
6	観音	新山	石仏座像	1尺3寸	
7	地蔵	田代野木場	木仏2躰		
8	毘沙門	**堤**	木仏立像	1尺5寸(約45cm)	伝：大汝八幡下向の際供奉
9	阿弥陀	**夜叉原**	石像座像	2尺7寸	伝：大汝八幡下向の際供奉
10	地蔵	中山	石仏座像	1尺2寸(約36cm)	
11	薬師	**金柑**	石仏座像	3尺(約90cm)	伝：大汝八幡下向の際供奉
12	宝集山　興焉寺		観音木仏		臨済宗多宝寺末寺

表2　「文政7年（1824）名勝志御再撰方萬しらへ帳　伊作」にみる田尻村の寺院・仏堂

※太字は門名と同一なもの

られていた可能性はあろう。

地域住民によって受け継がれ守られてきた仏像の例として，和歌山県有田市有田川町歓喜寺に伝わる平安時代前期の地蔵菩薩坐像の胎内仏といわれている，像高 3.3cm の地蔵菩薩坐像がある。歓喜寺什宝物由緒書写によると，この小像は，長らく無住であった歓喜寺で，寛文 4（1664）年 2 月 24 日に地蔵講で村中の人が寄り合い，掃除をしていた時に見つけたもので「村の宝」として位置づけられたという[10]。

この胎内仏は，小さな厨子に入れ，さらに袋に入れてもう一体の阿弥陀如来立像を納めた厨子とともに二重の箱に納められ，江戸時代から近代・現代まで区長（江戸時代は歓喜寺村庄屋）のもとで管理されており[11]，吹上町田尻の金銅菩薩立像も近隣の寺院にあった可能性も考えられよう。

2節　吹上町田尻の寺院

史料によって田尻にあったことがわかるのは，興焉寺と中島常楽院である。興焉寺は，臨済宗多宝寺（伊作中原村にある）の末寺で，開基年月日は不明，本尊は観音木像である。元は宝集庵と称していたが，島津運久が再興して興焉寺とした[12]。中島常楽院は天台宗で，盲僧琵琶を源流とする薩摩琵琶を確立させた寺院として有名である。その開基については，京都常楽院の 19 代宝山検校が島津家祈祷僧として，建久 7（1196）年島津忠久に従って下向し，中島に常楽院を建てたと伝える[13]。

また，注目されるのが御堂から徒歩 2 ～ 3 分の畠田遺跡から，須恵質の壺に入った開元通宝（初鋳年 621 年）から宣徳通宝（初鋳年 1433 年）まで 46 種以上の銭が 1976 枚出土していることである。遺跡は上田尻集落の北側の山の斜面の低い箇所で，発見場所の小字は畠田であるが，別称「ブツガサコ（仏ヶ迫）」といい，150m ほど東には石塔群があり，山裾には五輪塔の破片が散乱していたという[14]。中世の田尻地域には，伊作城の支城である瀬戸口城や大牟田城も存在しており，記録にはないが寺院が存在していた可能性が高いのではないか。

鹿児島県内における中世遺跡の出土銭貨について検討した池畑耕一氏は，鈴木公雄氏の出土銭貨の研究から，畠田遺跡の銭の埋納時期を 16 世紀第 1 四半期から第 2 四半期，遺跡の性格を寺院の境内ないしは近く，あるいは寺社に附属する門前町とした[15]。発見場所の山の傾斜の低い所という立地を考慮すれば，門前町というよりは，寺院の境内ないし近くといえるのではないか。出土した 1976 枚という枚数からして，宗教的な現象ではなく，寺院の利銭的活動による現象であろう。

3章　出土・伝来した飛鳥・白鳳仏

1 節　出土した飛鳥・白鳳の小金銅仏

加島勝氏は，飛鳥～平安時代までの出土した小金銅仏を検討し，出土地の性格を寺跡，経塚，山岳，古墳であることを明らかにしたが[16]，飛鳥・白鳳時代の小金銅仏の出土地に関しても同様に考えてよいであろう。（表 3 参照）以下，それぞれの特徴をみていきたい。

まず飛鳥・白鳳時代の寺院は，『日本書紀』推古 32（624）年 9 月丙子条によると寺院の数は 46 寺，天武 14（685）年に「諸国の家毎に仏舎を作り，仏像と経を置いて礼拝し供養せよ。」という仏教奨励の詔が出されたが（3 月壬申条），持統 6 年には全国に 545 の寺が存在した（『扶桑略記』9 月条）。推古 32 年の 46 寺はほとんどが畿内であること，出土した仏像は白鳳仏が圧倒的であることから，7 世紀代に地方で創建された寺院のほとんどは，天武の政策後に建立されたものであろう。また，飛鳥・白鳳時代の小金銅仏を出土した寺跡の中には国分寺跡が含まれている。国分寺は天平 13（741）年に聖武天皇が出した詔をもとに，それ以降に全国で建立されていったと思われるが，飛鳥・白鳳時代の小金銅仏の出土は，国分寺建立以前にもととなるような地方寺院が存在していた可能性が高い。

次に経塚だが，経塚は土中に経典を埋納した遺構で，釈迦の入滅から二千年を経ると仏法が衰えてしまうという末法思想（末法初年は 1052 年）と不可分である。人々は弥勒（みろく）仏がこの世に登場し，人々を救済する 56 億 7 千万年後まで仏法を残すために築いたのである[17]。経塚の現在最古の事例は，寛弘 4（1007）年銘の経筒から，藤原道長が金峯山（きんぶせん）山頂へ納めたもので，経塚は天台宗の僧侶が考え出し，彼らが加持祈祷（かじきとう）のために頻繁に出入りしていた貴族

	出土地	出土仏	時代
1	千葉県印旛郡印西町木下廃寺	菩薩頭部	白鳳
2	千葉県佐原市関峰崎横穴群三号横穴	押出如来三尊像	白鳳
3	東京都国分寺市国分寺跡付近	菩薩立像	白鳳
4	三重県津市鳥居古墳	押出如来座像	白鳳～奈良
5	滋賀県大津市穴太廃寺跡	押出菩薩	白鳳
6	京都府城陽市久世廃寺	誕生釈迦仏立像	白鳳
7	京都府相良郡笠置町笠置山笠置寺境内	押出如来座像	白鳳
8	京都府相良郡加茂町	観音菩薩頭部	白鳳
9	兵庫県加東郡社町平木清水寺境内	菩薩立像	白鳳
10	奈良県桜井市山田寺跡	押出如来座像	白鳳
11	奈良市西の京薬師寺西僧坊跡	如来立像残欠	白鳳
12	奈良市般若寺町般若寺十三重石塔	如来立像	白鳳
13	奈良市藤原町横井廃寺跡	菩薩立像	飛鳥
14	和歌山県伊都郡高野山金剛峯寺奥院	鋳出三尊像	白鳳～奈良
15	和歌山県東牟婁郡那智勝浦町那智経塚	観音菩薩立像	飛鳥
16	（伝）鳥取県東伯郡三朝町三仏寺寺域経塚	如来座像	白鳳
17	鳥取県東伯郡湯梨浜町一宮経塚	菩薩立像	白鳳
18	（伝）島根県浜田市石見国分寺跡（尼寺）	誕生釈迦仏立像	白鳳
19	島根県浜田市石見国分寺跡（僧寺）	誕生釈迦仏立像	白鳳
20	岡山県倉敷市浅原安養寺裏山	誕生釈迦仏立像	白鳳
21	香川県綾歌郡宇多津町	菩薩立像	白鳳
22	香川県高松市春日町坂田廃寺	誕生釈迦仏立像	白鳳
23	愛媛県南宇和郡御荘町平城山王社付近	誕生釈迦仏立像	飛鳥
24	愛媛県松山市（旧北条市）	誕生釈迦仏立像	白鳳
25	（伝）福岡県筑紫野市武蔵寺周辺	誕生釈迦仏立像	白鳳
26	福岡県英彦山山頂	如来立像	統一新羅
27	福岡県太宰府市観世音寺南大門付近	如来立像	統一新羅
28	福岡県太宰府市宝満山経塚	菩薩立像	白鳳？平安？
29	熊本県山鹿市菊鹿町鞠智城跡	菩薩立像	白鳳
30	鹿児島県伊佐市大口里	誕生釈迦仏立像	白鳳

表3　出土した飛鳥・白鳳小金銅仏
加島1991の出土の古代小金銅仏一覧表を一部改変

達にまず広がったと考えられている[18]。

福岡県では四王寺山，英彦山，求菩提山，福智山系や背振山系など霊山として著名な山で多数の経塚が造営されているが，天台宗及び関連する山岳修験の動向がこれら霊山における経塚造営と密接に関連するという[19]。経塚と天台宗の関係の深さがわかる。経塚の登場が平安時代中期なので，経塚から出土する飛鳥・白鳳時代の小金銅仏は，伝世していたものを埋納したのであろう。

古墳出土のものについては，当初から副葬品であったものと，破損してしまったものを後世一括して石室開口部から投げ入れたものがあったと考えられている[20]。また，山岳から出土したものは，奈良県の金峯山や栃木県の男体山，福岡県の英彦山など，いわゆる霊山の山頂に奉賽されたと考えられるもので，経塚埋納の仏像とは別の性格を有するという。仏像はほぼ平安時代以降の制作のものである[21]。

以上から考えると，飛鳥・白鳳寺院跡・古墳から出土した飛鳥・白鳳仏については，当初から出土地に所在していた可能性が高いが，経塚や霊山山頂に奉賽された仏像に関しては奉納者が持ち込むものなので，出土地とは異なり，かつ奉納者が入手するまでの来歴も不明ということになる。

2節　地方寺院に伝来した飛鳥・白鳳時代の観音菩薩立像

宝珠捧持菩薩は『観無量寿経』が流布する以前の初期の観音菩薩像と考えられており[22]，『日本の美術№166　観音像』[23]で紹介されている，飛鳥・白鳳時代の観音菩薩立像のうち古代の畿内（奈良・京都・大阪・滋賀県，兵庫県の一部）以外のものに，それらを調べる中で知り得たものを加えて（表4参照），伝来した寺院の特徴を述べていきたい。

鶴林寺は天台宗の寺院で，寺伝では聖徳太子が草創し，養老2（718）年に武蔵国大守大目身人部春則が刀田山四天王寺と改めたとされるが，平安時代後期に在地豪族の身人部氏の発願により建立されたとする説もある。「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」によると，8世紀後半には法隆寺の寺領が賀古郡に存在しており[24]，奈良時代には前身となる寺院もしくは仏堂などが存在した可能性もあろう。

一乗寺は伝説上の人物法道仙人を開基とする天台宗の寺院である。白雉元（650）年の創建とするが，草創期は不明な点が多い。ただし，応保元（1161）年以前には現在地にあり，播磨の天台宗寺院として特別な地位を確立していた[25]。同じく法道仙人を開基とするのが大分県の羅漢寺である。羅漢寺は，跡田の東の山腹にある山岳寺院で，大化元（645）年に法道仙人が修行をしたことに始まるとするが，やはり草創期は不明である。室町期に足利義満が羅漢寺の寺号を与え，寺領を寄付し，慶長5（1600）年頃臨済宗から曹洞宗へ改宗したという[26]。この二つの寺院で共通するのは，法道仙人開基だけではなく，宝珠奉持菩薩像に由来するとみられる，腹前で両手で水瓶を捧げ持つ，酷似した銅造観音菩薩立像が伝わっている。さらに那智山経塚出土の仏像にも酷似したものがある[27]。

酷似した仏像の存在は単なる偶然ではなく，それを解く鍵は法道仙人にあろう。法道は，播磨・丹波・摂津国の山岳寺院を中心に数多くの開基伝承をもつ神仙で，その伝承の形成にあたっては，平安時代末頃

	県	寺院名	現在の宗派	所在地	仏像	像高(cm)	造像年代	備考
1	兵庫	鶴林寺	天台宗	加古川市加古川町	銅造観音菩薩立像	83.0	7世紀後半	聖徳太子開基伝承
2	兵庫	一乗寺	天台宗	加西市坂元町	銅造観音菩薩立像	13.0	7世紀	法道仙人開基伝承
3	兵庫	一乗寺	天台宗	同上	銅造観音菩薩立像	48.0	7世紀後半	同上
4	兵庫	清水寺	天台宗	加東市平木	銅造観音菩薩立像	22.8	7世紀	法道仙人開基伝承・山岳寺院
5	鳥取	大山寺	天台宗	西伯郡大山町	銅造十一面観音菩薩立像	28.7	7世紀後半	山岳寺院
6	鳥取	大山寺	天台宗	同上	銅造観世音菩薩立像	36.8	7世紀後半	山岳寺院
7	島根	鰐淵寺	天台宗	出雲市別府町	銅造観音菩薩立像立像	79.8	7世紀後半	山岳寺院
8	島根	定恵寺	浄土宗	邑智郡美郷町	銅造観音菩薩立像	34.9※	7世紀後半	
9	大分	長谷寺	真言宗	中津市三光西秣	銅造観音菩薩立像	30.3	8世紀初頭	
10	大分	羅漢寺	曹洞宗	中津市本耶馬渓町	銅造観音菩薩立像	27.1	8世紀前半	山岳寺院・法道仙人開基伝承

表4　地方寺院に伝来する奈良時代以前の観音菩薩立像
注(23)(27)(33)(35)文献を参考に作成　※は縞高

に流布していた聖や神仙の伝がとりいれられていると考えられている[28]。聖とは，10 世紀に台頭してきた教団に属さず民衆教化を行い，広く崇敬された僧侶で，法華信仰と浄土信仰が信仰の支柱となっていた。法華信仰に基づき山林修行をおこなうものを持経者といい，呪術的性格を色濃く持っていた。このころ新たに興隆してきた天台・真言両宗でも山林修行が行われており，法華信仰と浄土信仰はいずれも天台宗を母体に平安時代に大きく発展し，聖の信仰は天台宗におけるこれらの信仰の興隆と連動しているという[29]。3 つの酷似した仏像の背景にあるのは，山林修行をおこなう聖もしくは天台宗の験者なのではなかろうか。なお，清水山（御嶽山）の山頂付近にある清水寺も法道仙人を開基とする天台宗寺院である[30]。

大山寺（だいせんじ）は大山中腹にある天台宗寺院で，奈良時代頃から山林修行の聖地として発展し，9 世紀末～10 世紀頃に天台宗寺院として成立し，また修験の道場として多くの行者が入山し修行していた[31]。また，鰐淵寺（がくえんじ）は北山山地の一峰鼻高山の北麓にある平安時代に成立した天台宗寺院で，平安時代には聖の修行の場として都の人々にも広く知られていた。また，平安初期以降修験道が盛んになると，鰐淵寺でも浮浪の滝を中心に修験道の本尊である蔵王権現が信仰されていた[32]。

定徳寺（じょうとくじ）は江の川沿いにある浄土宗の寺院で，寺伝では天正年中（1573－92），大森銀山大谷に創建されたが，銀山衰微にともなう荒廃のため宝永 7（1710）年に現在地に移転，復興したという[33]。

長谷寺は八面山の北東部山麓にある真言宗の寺院で，開基は不明。天正年間に諸堂が焼失し（三尊のみ兵火を免れた），その後，慶長 5（1600）年に細川忠興が金堂を寄進し，享保 9（1724）年に再建された[34]。伝来する制作年代白鳳時代の銅造観音菩薩立像の台座丸框（かまち）には，「壬寅年（702 年ヵ）六月十五日に周防国の凡直百背の女（むすめ）が亡くなり，誓願によってこの観音像を造立した」という意の銘が刻まれている[35]。周防国（山口県）に安置されていたものが，いつ大分県の長谷寺に来たかは不明である。この例から，仏像は長距離を移動する場合があることがわかる。

以上検討してきた中で，仏像の造像時から移動していない可能性があるのは鶴林寺のものぐらいで，あとは移動をともなうことがわかる。大河内智之氏は，移動する仏像について，多くは僧侶や権力者のネットワークの中で，あるいは地域住民のネットワークの中で行われており，また，高野山や比叡山などの多くの末寺を持つ本山では，本山・末寺の関係と僧侶の人的ネットワークの中でかなり遠方まで仏像が移動することがあるとする[36]。

表 4 に登場する 8 つの寺院のうち，5 つの寺院が山林修行を行う聖や修験者の存在をうかがうことができる寺院で，また，5 つの寺院が天台宗，1 つの寺院が真言宗と，山林修行を行う宗派に属している。飛鳥・白鳳仏が移動する背景には，聖・修験者といった移動する宗教者，または天台宗・真言宗という宗派のネットワークが存在していたのではないか。出土した飛鳥・白鳳仏に関しても，天台宗及び関連する山岳修験の動向が，霊山における経塚造営と密接に関連することは前述した。やはり，飛鳥・白鳳仏の移動には，天台宗や山林修行を行う聖・修験者などが関係している可能性が高いといえよう。

おわりに

吹上町田尻の金銅菩薩立像は，飛鳥仏と考えられており，奈良市横井廃寺出土の金銅菩薩立像と酷似し，横井廃寺は奈良県内の寺院と関係が深いことは 1 章で述べた。7 世紀後半の白鳳時代になると全国で寺院数は 545 寺で，『日本霊異記』をみると造寺・造仏の主体は地方の郡司層と考えられる。それに対し，飛鳥時代の寺院は 46 寺でほぼ畿内であり，造寺造仏の主体は畿内豪族であろう。とすれば，吹上町田尻の金銅菩薩立像も造像時は，畿内豪族の念持仏だったのではなかろうか。飛鳥・白鳳仏の移動には，天台宗や山林修行を行う聖・修験者などが関係している可能性が高いことを 3 章で述べた。平安後期，天台僧は加持祈祷などで貴族の邸宅に出入りしており，貴族との人的ネットワークを有していた。飛鳥仏を入手する可能性はあろう。

吹上町には山岳修験と関係する霊山は存在しないが隣接する南さつま市には，金峰山が存在する。金峰山は南薩一の霊山といわれ，古代より自然信仰・山岳信仰の山であったと考えられている。本岳・東岳・北岳の三峰からなり，中心の本岳には蔵王権現が祀られている[37]。「金峯山由来記」（『三国名勝図会』巻之二十九引用）では，推古 2 年に，従三位兼太宰大弐蔵人頭高橋卿が，勅使として大和国吉野の金剛蔵王（蔵王権現）を勧請したとあるが，地方的山岳信仰は，平安時代中期から末期にかけて熊野と吉野の大峯修験道に統合されていったらしく[38]，蔵王権現の勧請は平安時代中期以降といえよう。

また，山上からは，経筒，島津義久祈願品伝承のある土器，貨幣（寧熙元宝・皇宋通宝・嘉慶通宝・

洪武通宝），黄金の押出仏懸仏の破片が出土したといい[39]，経塚があった可能性がある。蔵王権現社の別当寺である観音寺は，江戸時代は真言宗寺院であるが，日吉山王との関わりから考えて中世は天台宗だったのではないかという説もあり[40]興味深い。平安後期以降，金峰山もしくは観音寺に金銅菩薩立像がもたらされた可能性があるのではないか。

また，島津氏の要請により京都常楽院の 19 代宝山検校が田尻の中島に建立した天台宗寺院の中島常楽院や，畠田遺跡付近に存在した可能性のある寺院も，もたらされた寺院の候補であるように思う。享保２年以来田尻で仏像が守り伝えられてきたことを考えると，少なくとも江戸時代には田尻に存在していたと思われる。

以上甚だ論拠に乏しいが，二つの可能性を指摘して稿をとじたい。なお，伊佐市大口里神池の畑より，白鳳時代の釈迦誕生仏が出土しているらしい[41]。今後その検討結果もふまえて，再検討できればと思っている。

註

(1) 八尋和泉「吹上町田尻の金銅菩薩立像」(『鹿児島県文化財調査報告書　第 53 集』鹿児島県教育委員会，2007 年)
(2) 大西修也「百済の仏像と東アジア」(『鞠智城シンポジウム 2012 成果報告書』熊本県教育委員会，2012 年)
(3) 註（1）に同じ
(4) 小笠原好彦「同笵軒瓦からみた大和横井廃寺の性格と造営氏族」(『滋賀大学教育学部紀要　人文科学・社会科学』№49，1999 年)
(5) 註（4）に同じ
(6) 註（1）に同じ
(7)「民間信仰」(『吹上郷土誌　通史編三』吹上町教育委員会，2003 年)
(8) 註（7）に同じ
(9)「諸制度の整備」(『吹上郷土誌　通史編二』吹上町教育委員会，2003 年)
(10) 大河内智之「移動する仏像と地域史」(『移動する仏像ー有田川町の重要文化財を中心にー』和歌山県立博物館，2010 年)
(11) 註（10）に同じ
(12)「寺院仏閣」(『吹上郷土史　下巻』吹上町教育委員会，1974 年)
(13)「琵琶文化の伝承地『中島常楽院』と「盲僧琵琶」」(『吹上郷土誌　通史編一』吹上町教育委員会，2003 年)
(14) 常田和彦「畠田遺跡出土銭について」(『出土銭貨』第 16 号，2001 年)
(15) 池畑耕一「鹿児島県における中世遺跡の出土銭貨」(『鹿児島考古』第 48 号，2018 年)
(16) 加島勝「出土の小金銅仏」(『季刊考古学』第 34 号，1991 年，雄山閣出版)
(17) 杉山洋『浄土への祈り　経塚が語る永遠の世界』(雄山閣出版，1994 年)
(18) 註（17）に同じ
(19) 森井啓次「福岡県の経塚遺宝」(『福岡の至宝に見る信仰と美』九州歴史資料館，2020 年)
(20) 註（16）に同じ
(21) 註（16）に同じ
(22) 註（２）に同じ
(23) 猪川和子「日本の観音像の流れ」(『日本の美術№166　観音像』至文堂，1980 年)
(24)『兵庫県の地名Ⅱ』(平凡社，1999 年)
(25) 註（24）に同じ
(26)『大分県の地名』(平凡社，1995 年)
(27)『特別展　西国三十三所　観音信仰の祈りと美』(奈良国立博物館，2008 年)
(28)「聖をめぐる信仰と物語ー命蓮・性空・増賀・千観・法道ー」(『平成 15 年度特別展　山寺の聖たちーその信仰と物語ー』吹田市立博物館，2003 年)
(29) 註（28）に同じ
(30) 註（24）に同じ
(31)『鳥取県の地名』(平凡社，1992 年)
(32)『修験の聖地　出雲国浮浪山　鰐淵寺』(島根県古代出雲歴史博物館，2014 年)
(33)『秘仏への旅ー山雲・石見の観音巡礼ー』(島根県立古代出雲歴史博物館・島根県古代文化センター，2008 年)
(34) 註（26）に同じ
(35)『みやこの仏世界と豊の国』(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館，1996 年)
(36) 註（10）に同じ
(37)「神社」(『金峰町郷土史　上巻』金峰町，1987 年)
(38) 五来重「吉野・熊野修験道の成立と展開」(『五来重著作集第６巻　修験道霊山の歴史と信仰』法蔵館，2008 年)
(39) 註（37）に同じ
(40) 栗林文夫「阿多忠景と源為朝ーその伝説と実像」(元木泰雄編『保元・平治の乱と平氏の栄華』清文堂，2014 年)
(41) 八尋和泉「九州の飛鳥・奈良時代の仏像ー九州仏像彫刻史の一節としてー」(九州歴史資料館編『大宰府古文化論叢　下巻』吉川弘文館，1983 年)

（たけもり　ともこ　資料調査編集員）